

札幌市立白楊小学校の取組

1. 研究のねらい

本校の校区内には、北海道大学がある。北海道大学には、海外から来られた多くの教授や、留学生がいる。また、本校のある北24条は、海外の方々が暮らしやすい街づくりを進めている。こういった背景もあり、子どもたちの生活には、身近に外国を意識する機会が多くある。しかし、子どもたちは日本で暮らす外国の方の生活や、いろいろな国についての知識は、決して多くない。一方で、札幌市内には外国の領事館があることも子どもたちは知っている。その領事館はどのような仕事をしているのかに興味関心をもっている児童も少なくない。そこで、まず調べる国を決め、個人テーマを設定し、ある児童は一人で、またある児童はグループで調べ学習に入った。次に領事館の仕事を調べる中で、広報活動も仕事の一つであることを知り、自分たちが「子ども領事」として、日本と他国との比較や「その国らしさ」「その国のよさ」などを伝える活動を考え、ねらいとした。

2. 取組内容

課題：子ども領事として考える、“その国らしさ”や“その国のよさ”を相手に伝えるために、何をどのように調べ、発表すればよいのだろうか。

(1) 領事について、外国について知る

①大使館、領事館について知る

本単元の導入では、子どもたちに建物の名前を伏せた上で、札幌にある領事館の写真を見せた。始めは建物を当てるゲームを楽しんでいるだけだったが、これが領事館だと分かると、「領事館ってどんな場所？」「自分たちに関係があるの？」「何をしている人が働いているの？」と疑問が沸き上がってきた。そして自国民を守ることと、自国の経済や広報活動も、その仕事の一つであることを知った。

②『子ども領事』としての活動

その国について深く知ることからスタートした。食や衣服、言語、生活の仕方、観光名所など、気になったものを書籍やインターネットを利用して調べ学習を進めた。調べていくうちに、「へえ～！日本ではこうなのに、〇〇では違うんだ！」「こんなところがあったなんて知らなかった！」「どうしてこんなふうに暮らしているのかなあ？」と、新たな疑問が出てきた。そこで、子どもたち同士の情報共有を図るため、国ごとにチームを組んだ。子どもたち同士話合い、調べてきた情報を交流した。



(2) 個人テーマを深める

国について広く調べた後、食やスポーツ、言語、音楽など、自分の興味関心に合わせたテーマについて焦点を絞り、調べ学習を行った。このとき、同じチームのメンバーと内容が被らないよう調整し、それぞれがその国のよさについて独自の観点から、迫っていった。

(3) 調査報告会のための準備

調べてきた情報を、一人ずつ四つ切1枚～模造紙2枚程度の紙にまとめた。6年間で培った力を結集させるという目標をもたせ、取り組ませた。見やすく書いているか、分かりやすい内容となっているか、子どもたち同士で内容の再考をしていた。

(4) 調査報告会開催！

今回は全体発表ではなく、ポスターセッション形式で行った。国ごとにブースを設け、子どもたちが興味のある国の発表を見て回れるようにした。それぞれ工夫された個性豊かな発表に、子どもたちは興味深そうに耳を傾けていた。報告会後は、大きな特別教室に作ったポスターを掲示し、いつでも見られるようにした。そうしたことで、関心の高い子は直接ポスターを作った子のところへ行き、質問をする姿が見られた。



(5) 在札幌米国領事館のゲストティーチャーから学ぶ

本来であれば、この単元のはじめに大使館とは、領事館とは、ということで在札幌米国領事館の領事にゲストティーチャーとして来校いただき、学ぶところであるが、今回は領事館や本校の行事の関係もあり、子どもたちが調べたことを確認するという形での学習になった。いずれにしても領事という仕事はもちろんのこと、領事自身が外国に興味をもち、このような外交官という仕事に就いたことなど、多くのことを学ぶよい機会となった。そして、外国や外国に関わる仕事について興味関心を増した子も少なくなかった。



3. 成果と課題

(1) 成果

自国の広報担当としての“子ども領事”という立場を子どもたち一人一人に与えることで、子どもたちは選んだ国の「よさ」や「らしさ」を伝えなければならないという想いを強くもった。領事として伝えるために、より詳しく調べなくてはならないという必要感が生まれ、友達同士の交流や内容の再考などを自発的に行う姿が成果として挙げられる。米国の外交官である領事から話を伺うことで、子どもたちは最も知っている米国についてさらに興味をもつとともに、自分たちが調べたそれぞれの国について、もっと詳しく調べてみたいという想いも強くした。そして、他国を知ることで、自国のよさを見直すきっかけにもなった。

(2) 課題

先にも述べたように今回は、米国領事のゲストティーチャーとしての訪問を、学習のまとめに位置付けた。ゲストティーチャーの話と調べてきたこととの比較から学びにつながった反面、調べたい事柄が広がり、消化不良な疑問がいくつか残った。興味深い話がいくつもあただけに、学習の初めに位置付けし、子どもたちの興味関心の幅をより広げる必要があると感じた。子どもたちの実態に合わせた単元構成の再考が課題として挙げられる。